



遊佐町／稲穂と鳥海山

庄内が金色に輝く 実りの秋

 庄内銀行

Cradle 

美しくなつかしい、日本をのせて。
「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

2012 September/October
平成24年9月1日発行（隔月奇数月発行）第2巻7号（通巻13号）

発行／Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15 株式会社 出羽庄内地域デザイン社 電話0235 (64) 0888
制作／Cradle編集部 山形県酒田市栗田2-59-3「コアック・コーポレーション」 電話0234 (41) 0012

美しくなつかしい、日本をのせて。

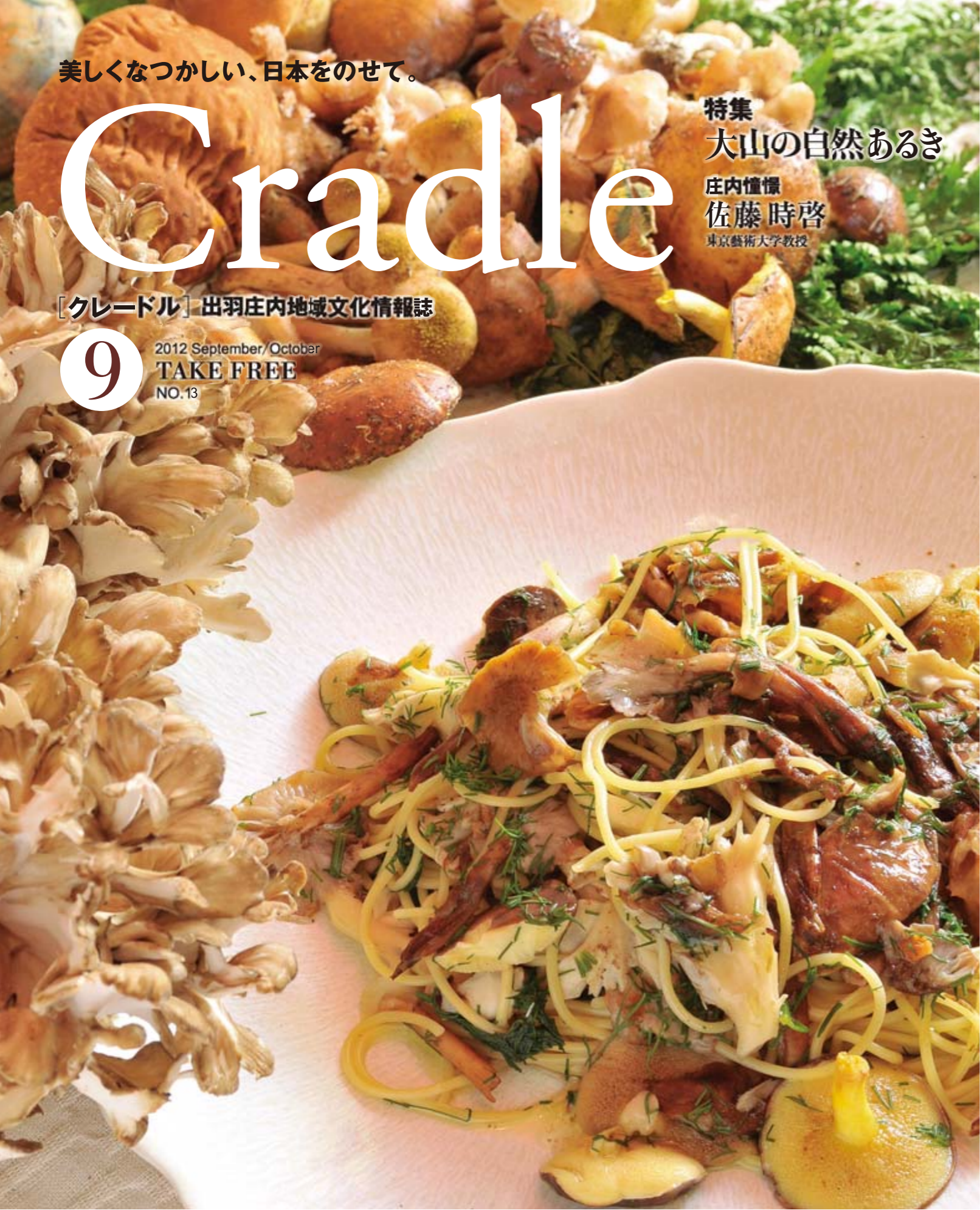
Cradle

【クレードル】 出羽庄内地域文化情報誌

9 2012 September/October
TAKE FREE
NO.13

特集
大山の自然あるき

庄内憧憬
佐藤 時啓
東京藝術大学教授



鉛色の空から差し込むピアノ線の束のような光は、私の表現活動の原体験となっているのかも知れない。光は闇の中でこそ、光るのだろう。

アイデンティティを形成した庄内での18年間。

佐藤時啓

私は酒田市の下台町（現在の日吉町）で生まれた。それから高校を卒業するまでの18年間を同じ場所で過ごしたのだから、アイデンティティにおけるそのほぼ100%が庄内人として形成されたといつてよいだろう。山と平野と海と川に恵まれ、四季を通して彩りが明快な土地柄は、「何でも楽しもう！」という現在の私の気質に大きく影響している。

実家が日和山に接する高台の一角にあったので、鳥海山と月山の両方が家から見えたこと、これは本当に幸せだったと感謝している。おかげで故郷のシンボルが胸にしっかりと刻まれた。また幼少から山王の山や日和山一体を遊び場に友だちと走り回り、現在よりも雪が多かった時代にはその小さな山々をスキー場にしてジャンプ台を作ったりして遊んだ。そして着地に失敗して雪面に真っ赤な鼻血を点々とさせたことなど、記憶に

鮮明に残っている。釣りや川遊び、海遊びもたくさんした。物心がついた頃には、自転車でさまざまなところに出かけていたようだ。小学校に入るや、その道の達人の友だちに連れられて、いたるところで釣り糸を垂れ、また大人が仕掛けた蟹網をこっそり上げて、中に入ったモクズ蟹を失敬する、という今では冷や汗もの遊びもしていた。その友だちと新井田川の山居倉庫の前に煙突を短く切って作った筒を仕掛け、見事に捕まえたナマズを得意げに家を持って帰ったのも、脳裏に焼きついて忘れることがない。

酒田港は、白灯台の北突堤と赤灯台の南突堤で囲われている。センチメンタルな気持ちになると、日和山の東屋のところに出かけ、旧灯台を手前に、遙か遠くに赤白の灯台をみながら、彼方に沈む夕陽を眺めていた。冬になると、どんよりと鉛色の空が広がるが、

時としてその隙間から差し込むピアノ線の束のような光は、強烈なイメージを私に植えつけてくれた。西欧では「天使の梯子」と呼ばれるように、何か神懸かって崇高に見える。それが私の光に対する原体験となっているのかもしれない。光は明るい場所では認識されず、闇の中でこそ光るのだろう。

また小学校の遠足では、高砂地区を超えて現在の北港の方まで行って芋煮会をした。芋煮は山形県を代表する秋の風物詩であるが、地元の子どもたちはこの頃に初めて野外での料理体験をするのである。流行のアウトドア派でも何でもなく、生まれつきの野外料理好きになるわけだ。これも現在の私のライフスタイルの原点となり、この文章を書いている今も私は、現地の食材を手に入れ、自炊しながらのキャンプによる北海道撮影の旅を続けている。



8月17日、北海道旅行を終えて訪れた鶴岡市加茂の荒崎灯台より。
写真＝佐藤時啓

さとう・ときひろ／美術作家・写真家・東京藝術大学教授。1957年、酒田市生まれ。酒田東高校卒業後、東京藝術大学彫刻科入学。ヨーロッパ各地での制作活動を経て、99年、同大学先端芸術表現科助（准）教授就任。同年、酒田市美術館にて「光―呼吸―」展開催。今夏は8月18日の鶴岡アートフォーラム主催「市民交流プログラム」にあわせて来庄。

特集

大山の 自然あるき

さまざまな生き物が生息する都沢湿地、
「野鳥の楽園」と呼ばれ、ラムサール条約に
登録されている上池と下池、
ブナの森が清々しい高館山。
人里近くにかかわらず、豊かな自然が広がる
鶴岡市大山の高館山周辺を、夏のある日、
案内人と一緒に歩いてみました。

トピラとP10~13の写真＝齋藤圭介 (FRAMEWORKS)

動植物たちが生きる姿に 喜びと恵みを実感。

「湿地」は、低地の浸水域のこと。
そこは多くの動植物たちが、生命を育み
つながり合いながら暮らす場所です。今、生物多様性を
守るため、その保全が世界的に進められています。

ほとりあ
下池河畔
遊歩道
都沢湿地
ほとりあ

長く土に埋もれていた希少な
植物も芽を出し始めた都沢湿地。



コフキトンボのメスの「オビトンボ型」。
出現確率1%程度で希少。



チョウトンボ。ホバリングしながら
空を舞う姿はまさに蝶のよう。



フタモンベッコウが狩ったオニグモを
巣に運んでいる様子。



案内くださった方
水野重紀さん

水野 野生生物調査室主宰

一緒に歩いた方

小松馨さん〔文〕

里山料理研究家
ほとりあサポーター

を作っていました。小鳥の声を聞きながら、緑の小道を進んでいきます。すると、遊歩道の中ほどまで来たあたりで、どこからともなく甘い香りが漂ってきました。伝統工芸の「しな織」で知られるシナノキの花の香りです。小さいミモザのような花がはらはらと舞い、まるで香りのシャワーのよう。五感を刺激されるこの遊歩道は高低差もあまりなく、四季を通して気

都沢湿地は、庄内平野の典型的な 湿地生態系をもつ、鶴岡市の都市公園です。

武田壮一 文 鶴岡市企画部地域振興課 | Takeda Soichi

意外に思われるかもしれませんが、「都沢湿地」は鶴岡市の都市公園です。庄内平野の典型的な湿地の生態系をもつため、市民の憩いの場としての公園であると同時に、自然環境について学べる、特別な機能を併せ持った「特殊公園」という位置づけです。

さらに近隣にはラムサール条約登録の大山上池・下池と自然休養林の高館山があり、この辺り一帯で開催される自然観察会や学習会はとても人気のメニューです。

都市公園としての都沢湿地の特徴をひと言でいうと、「生きもの（生態系）にとっても配慮している」ことです。そのため湿地の整備や鶴岡市自然学習交流館の建設に

あたって最大限の配慮をしました。さらに見えにくいことですが、園内の規制にも特徴があります。通常の都市公園は、動物の捕獲や植物の採取などを禁じていますが、都沢湿地はそれに加え、生きものを放すことや植物を植えたり種をまくことも規制しています。つまり外来の動植物が侵入するのを防いでいるのです。それでも外来種の害が後を絶ちません。そのため年間を通して市民サポーターと外来種の駆除活動を実施しています。

このように、都沢湿地は日本の原風景ともいえる自然生態系の保全に努めている都市公園です。ぜひ遊びに来て、豊かな自然に触れてください。



このコースのみどころ

県内で一番トンボ類が多く見られるこの一帯。「かく乱」によって発芽した植物や、メダカやミクリなどレッドデータブックで絶滅危惧種に指定されている生物も多く見られます。

分転換にはちょうど良いお散歩コースといったところでは、木立を抜けると、下池の畔には睡蓮の花が咲いていました。するとそこで蝶々らしき大群を発見！『チョウトンボ』だ！と水野さん。黒い大きな羽根を優雅に動かしていたのは、じつはトンボ。光線によって玉虫色に輝く羽根は、それはそれは美しいものでした。水野さんによると、このトンボはここ10年ほど数が少なかったそう。これこそ、自然が与えてくれた奇跡の瞬間です。「いい自然とは、多様な生物がいること。植物も虫もつながりあって豊かな生態系ができていくことです」と水野さん。私たちは、日々の暮らしの中でこうした里山での体験や感動を、別次元のできごとのように考えてしまいがちです。しかし、大山の動植物たちはその生き方を通して、喜びや恵みを感じる瞬間がごく身近にあることを思い起こさせてくれます。どこまでも飛びながら私たちに届いてくるトンボたちに「また遊んでね」と声をかけて、下池をあとにしました。

下池を訪れたのは、澄んだ青空が広がる7月中旬。空の下には、濃い緑に変わりゆく高館山と、キラキラまばゆい湖面が広がり、都沢湿地に足を踏み入れると、1匹のトンボがスーッと目の前に来て出迎えてくれました。「粉をまよつたような見た目、これは『コフキトンボ』です」と水野さん。じつはその時まで、「虫はちよつと苦手」と思っていたのが、その美しさに魅了され、大山の動植物に引き込まれていく私がありました。この時期の湿地を歩くと、次々に珍しいトンボに出会います。「ハグロトンボ」「ゴシアキトンボ」「マユタテアカネ」。これだけの種類が生息できるのは、その環境を守り続けてきた人がいるから。変わってしまふのは簡単ですが、守ることとは、先人から受け継いだ森の掟や里山の営みを続けることです。動植物を通して人の暮らしが見えるような気がしました。

真夏の湿地から一転、下池をぐるりと囲む遊歩道に入ると、寒地系のブナや暖地系のカラスザンショウなどの木立が気持ちのいい日陰

港町加茂への旧道。子どもの頃歩いて海まで通った道。帰りはヘトヘトで、通る車をヒッチハイクしたものです。そんな話をしながら上池コースへ。入口付近をトンボが飛んでいます。「ハグロトンボだの。40年近くいなかったのが3年ぐらい前からいっぱい見るようになった。これは生き物たちの『備え』。子孫を絶やさないように何十年も生き残しておいた卵がある条件で孵化したんだの。自然のしくみはよくできてるよの」。

木や土、夏草の匂い。鬱蒼とした中にクルマユリが一輪、愛らしい姿で迎えてくれました。私一人がやっと通れるぐらいの道を、上池の入り江の方へと下ります。向かう先に見えたのは、大きく葉を広げたミズバショウの群生。見頃にはその清楚な姿に「今年も咲いてくれた」と何度も訪れる人の多い場所です。昔、草履の材料にしていた水草のフトイも見られます。ふと、静かな流れにカジカを見つけて「いたいた！」。以前は、スジエビやカワガニなどもすんでいた水辺です。湿原から向こ

うの山肌を登ると、今度は上手な歌声が聞こえてきました。イカルです。太田さんが真似てくれたメジロのさえずりもじつに名調子。

上池コースと城山コースが出会うところで、偶然、地元の方五十嵐郁子さんにバッタリ。彼女も私と同じ一人山歩きの愛好者(っ)。

さらに三人で城山コースを登ります。ハツタケやゼンマイ、アイコ、納豆汁に欠かせなかったヌメリササタケなどを見つけ、来る秋の恵みに話が尽きません。昔、大山地域では「山探り」といって、営林署から鑑札を買い、シバや栗広などをして自由に山の恵みをいただける日がありました。「ここは宝の山。生活の一部だったよの」と太田さん。でも、山の様相は随分変わりました。美味しいところ取りした私たちの不見識ですが、本来それが山歩きの喜びだったのです。そうするうち、優しい緑のブナ

の林が現れました。まるで別世界何と心地よいこと！ ころうじて変わらぬにいてくれたブナ林。大切に守っていききたいものです。

帰路の城山コースで「ほらほら、

8月のハスの花採りと9月のレンコン採り。昔と変わらない姿で続く、上池の風物詩。

三ツ倉豊 「浮草組合」組合長 | Mitsukura Yutaka

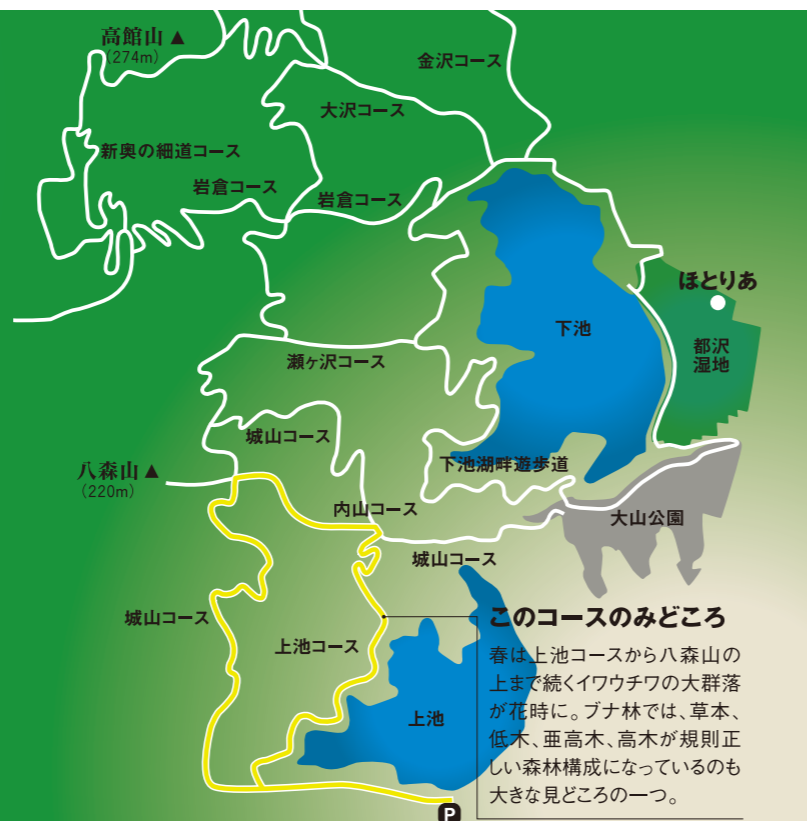
大山には全国でただひとつの「浮草組合」があります。江戸安政年間以前からあり、現在は三ツ倉豊さんを組合長に、42名の組合員で構成されています。

毎年、約15ヘクタールの上池にハスの花が咲くと、組合の役員が花を採ります。「盆前の8月10日と11日の2日間は、雨が降ろうとも何があっても花を採るって昔から決まってるなや」と三ツ倉さん。収穫後、花2本と巻葉とハスの葉3枚が組合員の家庭に配布され、それ以外は地元と酒田に出荷されてお盆に供えられます。

9月に入ると、15日から20日の間にレンコン採りが行われます。以前は池に直接入って採りましたが、今

は船上から棒で引っ掛けて採る通称「かぎぬき」という方法で行っています。「全ての葉っぱさレンコンになるわけでないから、それを見定めるのが難しなや。でもこのレンコンはうめよ」。

先祖を弔うお盆の花や食卓にぎわす食材として、大山の暮らしと密接に関わってきた上池のハス。自然と人の共存は、この地で今もくり広げられています。



このコースのみどころ
春は上池コースから八森山の上まで続くイワウチワの大群落が花時に。ブナ林では、草本、低木、垂高木、高木が規則正しい森林構成になっているのも大きな見どころの一つ。



懐かしい「山探り」の思い出。「子どもも立派な働き手だったの」。



秋になると熟すカヤの実(チャボカヤ)。干して炒って食用。



杉林を抜けてブナ林になるといろいろキノコがたくさん。



樹高25mほどあったブナの倒木。太田さんは長年その経過を撮影。

- 上池駐車場
- 上池コース
- 城山コース
- 上池駐車場

大山地域の人たちにとって森の中は暮らしの場所でした。木々を生活に用い、山菜やキノコなどの食材を得て、山歩きを日課とする。山の物語は、人それぞれの物語でもあるのです。

山は人の生活の一部 共に変化してきた森の様相。



案内くださった方
太田威さん
自然写真家
尾浦の自然を守る会

一緒に歩いた方
阿部琴枝さん[文]
ほとりあサポーター

面白いものある」と太田さん。見ると、朽木にヒラタケがびっしり。大理石の彫刻のようにも見える自然摂理の産物です。やがて左側斜面に植林された細い杉林が広がり、ひととき大きな巨木が道を塞ぐのを潜り抜けると、カスミザクラの木が枝を広げて待っていてくれました。花の季に想いを馳せ、ブナの森と太田さんの山物語にふれた、幸せな一日となりました。

白々と夜が明け、すべての木々や葉に朝日がふりそそぐ真夏の朝。この日は早朝の「高館山さんぽ」に出かけました。ご一緒したのは、森林生態学の権威である山形大学の林田先生。樹木の名前から森林保全の実態まで、見どころがぐんと広がった山歩きを楽しみました。「高館山には百種類以上の樹木があつて、北と南の植物が混生しています。ブナの下にヤブツバキが咲くなんて、他ではなかなか見られない光景なんですよ」。しな織りのシナノキ、楊枝になるクロモジ、初夏に花が咲くトチノキ、メーブルシロップがとれるイタヤカエデなど、個性的な樹木がたくさん。日中は身を隠している生き物も多く生息しています。

大山公園の北口から下池を見下ろして登り、城山コースへ。左に上池が見え隠れする道の斜面は、春になるとカタクリやイワウチワが一面に咲く名所です。城山コースから続く内山コースは、岩肌が出ていて少し滑りやすいアップダウンの道。その先の岩倉コースから八森山の頂上へ向かう道沿いに

関係のお話。「アリはカタクリの種が好物。種についている『エライオゾーム』という脂質が目当てです。そのためにアリは一旦種を巣に運んで、脂質だけをとると、種を巣の外の別の場所に捨てて行くんです。アリの力を借りて種子を撒いているんですね。こうした植物はたくさんあるんですよ」。

そして最終、岩倉コースから下池のほとりを周回します。ここまでは、ブナ林、ケヤキ林、どんぐりのコナラの林を抜けてきました。「この3つの森が高館山の特徴です。市街地に近い小さな山の中で、山の中腹に生える樹木の林と、沢の中に生える樹木の林というバリエーションが楽しめるんです」。

下池のほとりに立って高館山を望むと、いつもの風景にほっとします。この日は山の内側を歩いてきましたが、こうして山を外側から眺め、季節ごとに山の色が変化するのを見るのが私は好きです。大山つ子にはこの大自然に触れて、いつまでも歩いたり遊んだりしてほしいものです。

身近な森林で過ごす「つるおか森の時間」と市民が学び、教えあう「森のソムリエ」事業。

平智=文 山形大学農学部教授・鶴岡市森林文化都市研究会副会長 | Taira Satoshi

鶴岡市では数年前から年に3回、市民の皆さんと森歩きをする「つるおか森の時間」を開催しています。参加人数は毎回30~40人程度。高館山もこれまでに何度か歩き、秋には朝日地域にある山形大学農学部演習林で「森の芋煮会」を行うのが恒例になりつつあります。「森の時間」の目的はいたってシンプル。鶴岡の広大な森林を私たちのかけがえのない財産ととらえ、できるだけ多く、森とふれあう時間を日常生活に取り戻しましょう、ということです。本来はそれぞれが思い思いに森という空間で時を過ごせば、それでよいのですが、せっかくだから森や木について少しだけ詳しくなりま

しょうということで、それを手助けしてくれるのが「森のソムリエ」です。森林や自然について、誰でも自由に参加して学べる「森のソムリエ」講習会を年2回ほど開催しています。学習の回数や経験の程度によってソムリエの星が増え、学習の成果は「森の時間」などで案内役となって皆さんに披露してもらいます。市民自らが学び、教え、教わる仕組みです。また、鶴岡市森林文化都市研究会では今年、「つるおか森の散歩道20選」を選定しました。「大山下池周遊コース」も入っています。マップを片手に「森の時間」をもっと、楽しませてください。



このコースのみどころ
城山コースのブナ林、瀬ヶ沢コースのケヤキやトチの林、岩倉コースのナラ林と、特徴的な3つの林を満喫。春はカタクリの花やギフチョウなどとの出会いも楽しみどころ。



ブナ林。キツツキが開けた樹洞(じゅうどう)は生き物たちのすみか。



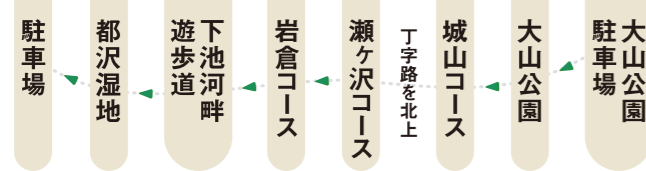
高木が倒れて光が差し込んだ森は生物と命がめまぐるしく動く場所。



山で最も大きなケヤキ。ブナやトチノキの巨木も多く残る高館山。



7~8年前のナラ枯れを生き残った岩倉コースにあるナラ林。



樹木と水と、植物や生き物が住むための環境が凝集したようなこの一帯。歩くたびに変わっていく山の中の景色は、この場所の自然がいかに多様であるかを象徴しています。

高館山さんぽは多様な自然との出会い。

案内くださった方
林田光祐さん
山形大学農学部 教授
一緒に歩いた方
荻原恵美さん〔文〕
鶴岡市大山自治会
ほとりあサポーター



山一番のケヤキの巨木があります。「高館山には幹周り3メートル以上の巨木が百本以上あります。昔の人が種木として残したものでしょうね」と林田先生。何百年もここに根を張る木を見上げていると、力強い生命力を感じました。ふと地面に大きなアリが歩いてのを発見。胸のあたりが赤い、ムネアカオオアリです。私が最も興味深かったのが、アリと植物の



学習交流室で地元の方のお話しを聞く子どもたち。



玄関の壁面にある、来館者をつくる「里山情報マップ」。



ストーブ用の薪準備を手伝ってくれるサポーターさん。



「積み木の部屋」にて自由な発想で遊ぶ子どもたち。この積み木については本誌16ページで紹介。



大山小学校の4年生が総合学習の時間に都沢湿地の泥んこ広場で生きものさがし。



自然観察会「水辺の生きものみつけ♪」

ほとりあのロゴマークが決まりました。



緑色は周辺の多様な環境を、2つの丸は上池と下池を、渦巻きは高館山の山並みと山に降り注いだ水の流れや生きものつながりを、右横にある「y」のような形は野鳥やトンボなど飛び出す生きものを表しました。自然のもつ温かさをイメージし、全体的に丸みをもたせています。原案／井上典子さん 作成／サポーター有志とほとりあ

ほとりあイベントinfomation

都沢湿地自然観察会と外來種駆除活動
9月8日(土) 13:30~
指導:林田光祐氏 参加費無料

オオヨシキリの巣一斉カウント調査
9月16日(日) 9:30~
指導:宮川道雄氏 参加費:200円

木音の観月会 in ほとりあ
9月30日(日) 18:00~
参加費:500円

※お問い合わせは「ほとりあ」へ

鶴岡市自然学習交流館 ほとりあ

鶴岡市馬町字駒繫3番地1
tel.0235-33-8693
http://hotoria-tsuruoka.jp/
9:00~16:30、火曜休館、入館無料

構想」の拠点施設として設けられました。これは、森と人の新しい関係づくりを目指す鶴岡市の「森林文化都市」構想のひとつ。面積の多くを森林に覆われた地域にとって、森と人との共存のあり方は大切な課題です。建物は市の指定管理者である鶴岡市大山自治会が管理し、館長と

学芸員を含めたスタッフ4名が「環境保全・自然教育・里山の利活用」の三本柱で活動しています。そしてそれを支えるのが「ほとりあん」と呼ばれるサポーター。約110名が登録し、外来植物の駆除や薪ストーブの薪準備、地域の動物や歴史文化についての自主的な学習活動などを行っています。

館長の植松芳平さんは話します。「3・11の大震災以降、否が応にもライフスタイルの見直しが進まれました。人間も他の動物と同じように自然の中で生かされている存在です。今後、自然にやさしい循環型の地域社会をつくるにあたって、ほとりあがその一翼を担う施設になれたらと思います」。



木の温もりに包まれた館内。壁面には「森林文化都市構想」や「庄内自然博物館構想」についてのパネル展示のほか、展示企画が季節ごとに開催されて、自然に関するさまざまな発見があります。



今回めぐった大山には、散策の拠点ともなる鶴岡市自然学習交流館「ほとりあ」があります。どのように利用でき、どんな活動をしているのか、スタッフの皆さんから教えてもらいました。

自然を愛する人たちが下池のほとりに集う場所。

多様な活用に期待が広がるほりあですが、もともとは「自然を愛し科学する心」「生命の大切さを感じる心」「郷土を愛し誇りを思う心」という3つの心を育むことを目的とした「庄内自然博物館

年4月、都沢湿地の北端に誕生しました。自然愛好家の間で以前から知られてきたこの地域で、さらに誰もが自然と触れあえる環境づくりが進んでいます。例えば散策やトレッキングをする場合には、車を止めて拠点施設として利用できます。散策ルートがわからない場合には館内の玄関壁面にある「里山情報マップ」を要チェック。散策の間には休憩したり、飲食物を持ち込んで「まつたりルーム」で昼食タイムをとることもできます。

自然散策はしないけれど館内に入ってみたいという場合も、時間内なら誰もが無料で入館できます。地元産木材を多く利用した建物は木の香りに包まれ、2階までの吹き抜けは開放感と木の生命力を感じさせます。森林資源の循環を感じてもらうため、近くの森の木を使った薪ストーブやペレットストーブを使用。鶴岡の木で作られた積み木で遊べる「積み木のへや」も用意され、全館にわたって子どもからシニアまで幅広い年齢の人たちが自然と触れ合う空間づくりがされています。また壁面には季節ごとに異なる企画展示が飾られ、約40人収容の学習交流室は学校の学習活動などにも活用できます。

子どもから大人まで皆が自然と触れあえるように

池のほとりに自然を愛する人たちが集まってほしいという意味で名づけられた「ほとりあ」は、今

自然散策はしないけれど館内に入ってみたいという場合も、時間内なら誰もが無料で入館できます。地元産木材を多く利用した建物は木の香りに包まれ、2階までの吹き抜けは開放感と木の生命力を感じさせます。森林資源の循環を感じてもらうため、近くの森の木を使った薪ストーブやペレットストーブを使用。鶴岡の木で作られた積み木で遊べる「積み木のへや」も用意され、全館にわたって子どもからシニアまで幅広い年齢の人たちが自然と触れ合う空間づくりがされています。また壁面には季節ごとに異なる企画展示が飾られ、約40人収容の学習交流室は学校の学習活動などにも活用できます。

ふわっと広がる杉の香り
ぬくもりを感じさせるやわらかな肌ざわり
バウムクーヘンのような木目の美しさ
森から生まれた、やさしい玩具の登場です

庄内あつみ杉の 積み木

「木育」という言葉がある。子どもの頃から地域の木に触れ、実際に使うことで、森林を大切にすることを育てるといふものだ。この動きが北海道から始まり、全国に広まった今、庄内で地元の木100%の積み木が商品化された。

手がけるのは温海町森林組合。海と山に挟まれた地形上、雨が降りやすく、杉の生育に適したこの地域は、昔から林業が盛んだった。また同地区にあった職業訓練校が大工をたくさん輩出したため、輸入外材に押されて国内の林業が衰退する中で、地元を杉を使った家づくりが守られてきた。当組合が全国でもめずらしく製材部門と加工部門まで持つのはこの地域性にあるのだろう。積み木は、加工部門が4年前にやまがた公益の森づくり支援センターと共同開発し、庄内各地の保育園に毎年配布してモニター調査を行ってきたもので、商品化を求める声が寄せられたことから実現した。手入れの行き届いた森でスクスク育った杉の積み木は美しく、香りもよい。手にとれば杉ならではの軽やかなぬくもりや、やわらかさを実感する。全ピースとも丁寧に面とりし、無塗装で仕上げているため、赤ちゃんが舐めたり投げたりしても安心だ。温海町森林組合の五十嵐雅樹さんは語る。

「小さい時に地元の木で作った積み木で遊んだ記憶が残れば、森林を大切に感じる感性も自然に身につくと思います。特に木材は地域で生産し、地域で使える再生可能な資源です。エネルギー問題が大きな課題になっている今こそ、地域の森林に目を向け、積極的に触れてほしいですね」。のひらサイズの積み木には、未来が宿っている。



写真の積み木は子どもの手よりちょっと大きい4センチ基尺。正方形、長方形、円筒形、三角形など全部で50ピースが木箱に入っていて、出産祝いや誕生日の贈り物などにピッタリ。温海町森林組合では、ほかにも庄内あつみ杉による「根株イス」や「ベンチ」などを制作、販売している。

温海町森林組合 ☎0235-43-2313
ご購入のお問い合わせはCradle Shopへ
☎0800-800-0806



庄内写真季行 11 鶴岡市

鋭い眼で森を見守るオオタカの水と戯れる、穏やかなる時間。

オオタカは、普段は見晴らしのきく樹上において、鋭い眼であたりを見回しています。ある日、里山を歩いていると、沢のせせらぎに変わった水音がしました。ふと見ると、オオタカが水浴びをしているところでした。その昔、

殿様の鷹狩りに用いられていたというオオタカ。双眼鏡で見ると気高く厳しい印象を受けますが、ほの暗い水面に何度も羽を打ちつけて羽繕いをするオオタカは、心なしか穏やかな表情に思えました。